

の紹介基準を作成し、6か月毎に当院を定期受診のうえ評価し、あわせて栄養指導、糖尿病療養指導を行うこととした。2010年1月までに、計105名が導入に同意し、うち71名が初回6か月後の評価を行われた。導入前、平均HbA1c 6.57 ± 0.59%、6か月後、6.77 ± 0.74%であったが、パスを継続できた53名は6.59 ± 0.64%と有意な増悪はなかった。パスを逸脱した18名(25%)の理由のうち、コントロール、合併症の悪化が7名(9.8%)、また受診中断が5名(7.0%)にみられた。今後の連携継続にあたっての検討事項として、合併症発症率の評価、連携病院間の治療の標準化などの方針、患者理解や満足度などが挙げられる。

10 頸動脈超音波検査

～当院の検討と症例～

丸山千恵子

長岡赤十字病院検査技術課

【はじめに】食生活の欧米化、運動不足などにより、動脈硬化に基づく心血管、脳血管障害等が増加している。頸動脈超音波検査は全身の動脈硬化の評価、脳血流の関節的評価に広く用いられ、糖尿病の合併症の検査としても重要な役割を果たしている。今回、当院の頸動脈超音波検査のブラークスコア(PS)とmax.IMTの検討と症例を報告する。

【対象と方法】2009年1年間の707名のうち糖尿病と脳梗塞の458名、男性272名、女性186名、27歳から97歳、平均年齢67.5歳を対象に糖尿病、脳梗塞、両方の3群を性別、年齢別に分けPS、max.IMTの平均を求めた。

【結果】糖尿病群は脳梗塞群と同程度のPS、max.IMTで、年齢と共に上昇し、健常者に比べ明らかに高値を示した。危険因子と動脈硬化の進行例、無症候性閉塞例も紹介する。

【結論】頸動脈超音波検査は経過観察や無症候性重症例を発見する上で有用である。

11 糖尿病患者における経皮的 advanced glycation endproducts の測定と合併症に関する検討

石澤 正博・古川 和郎・皆川 真一
森川 洋・阿部 孝洋・金子 正儀
植村 靖行・鈴木 裕美・山田 貴穂
小菅恵一朗・羽入 修・相澤 義房

新潟大学医歯学総合病院第一内科

【背景】AGEs(最終糖化産物)は、近年糖尿病(DM)とその合併症などとの関連が示唆されている。皮膚中のAGEs量が血中・組織中のAGEs量と相関することから、非侵襲的に皮膚のAGEs沈着量を測定できるAGE Reader(TM)が登場したが、日本人でのevidenceはまだ乏しい。

【目的】DM合併症とAGEs量の関連を解析し、その有用性を検討する。

【方法】DM・耐糖能異常の患者の皮膚AGEs量(AF値; Autofluorescence)の測定を行い、DMとそれに関連する各種因子との関連を統計学的に解析した。

【結果】AFと年齢、DM罹病期間には各々正の相関があり、HbA1c、血圧、各種血中脂質とは各々無相関であった。DM網膜症陽性群・蛋白尿陽性群・頸動脈硬化陽性群は、各々陰性群と比べて有意にAF値が高値だった。

【考察】AFは未知の合併症のスクリーニングマーカーとして有用な可能性が考えられた。

12 LH-RH 誘導体使用後、HbA1c の急上昇を認めた 2 型糖尿病の 1 例

竹田 徹朗・竹山 綾・蒲澤 秀門
飯野 則昭・坂爪 実・成田 一衛
齋藤 亮彦・鈴木 芳樹

新潟大学医歯学総合病院第二内科

症例は43歳、女性。2002年よりnon IgA腎症と糖尿病にて経過観察中で、HbA1cは6~7%台で経過していた。2008年より過多月経と貧血にて産婦人科に通院中であったが、2009年7月に子宮筋腫の手術を希望し、術前の筋腫縮小を目的にLH-RH誘導体(Leuprorelin)が開始された。開

始後貧血は改善したものの、同年10月HbA1c 9.5%まで上昇したためLH-RH誘導体が中止され、術前血糖コントロール目的に入院し、インスリンにて血糖コントロールされた。本症例ではLH-RH誘導体によって偽閉経状態が作られたことで、脂質異常症が悪化しており、インスリン抵抗性が増大した可能性がある。また、HbA1cが、慢性の不正出血と鉄剤による貧血治療によってみかけ上低値を示し、実際の血糖値を過小評価していたが、不正出血が治療されたことで赤血球寿命が延長し、HbA1cは実際の血糖値を反映するようになったと考えられた。

13 Diazoxide が有効であった、高齢者インスリノーマの2例

松林 泰弘・原 正雄・佐々木英夫
厚生連新潟医療センター糖尿病・
内分泌内科，糖尿病センター

インスリノーマは、インスリン過剰産生から低血糖を来し、意識消失などの症状を呈する。インスリノーマの多くは良性腫瘍であり、治療の基本は手術療法となるが、手術不能例では薬物療法検討の適応となる。今回、高齢であり、重度の認知症、慢性心不全等の合併症を有し、患者・家族ともに手術療法を希望されなかったケースで、Diazoxideを投与し、血糖コントロールが可能になった症例を経験した。若干の文献的考察も含め、報告する。

症例は、85歳、男性と87歳、女性。2例ともに主訴は低血糖に起因する意識消失であった。入院後も低血糖発作を繰り返し、ブドウ糖投与により意識消失は改善した。血液検査では、著明な高インスリン性低血糖を認め、Fajan index, Taminato指数もインスリノーマに矛盾しない所見であった。腹部造影CT、血管造影検査、選択的カルシウム動注負荷試験で、膵頭部のインスリノーマと診断した。高齢であり手術を希望しないことから、インスリン分泌を抑制し、低血糖発作を予防する為Diazoxide投与による薬物療法を開始。その後、軽度の心拡大増悪、両下肢のpitting edemaを認

め、Diazoxideの副作用と考えられたが、利尿剤の投与により速やかな改善が認められた。他に重篤な副作用は出現せず、血糖値も安定した。手術不能なインスリノーマの症例に対し、Diazoxide投与は血糖維持に有用であると考えられた。

14 透析導入後に発見されたCushing病の一部例

細島 康宏・山崎 肇・吉田 一浩
皆川 真一・木村 慶太・鴨井 久司
長岡赤十字病院内科

症例は61歳、女性。平成19年9月25日、腎不全のため血液透析に導入され、他院で維持透析中であった。平成20年9月頃から下肢の筋力低下が出現し、コルチゾール $53.8\mu\text{g/dl}$ 、ACTH 364pg/ml と高値を認めたため入院予定であった。しかし、右視床出血および肺炎を発症し、10月15日に緊急入院した。難治性胃潰瘍を併発しており、出血のため12月30日に死亡した。経過中にガストリンの高値を認めたため腹部CT、カルシウム負荷試験を行ったが、ガストリノーマは否定的であった。また、CRH負荷試験を行ったが、ACTHおよびコルチゾールともに持続高値で変動に乏しく、頭部MRIでも微小腺腫とは判断できず、Cushing病とは診断できなかった。中心静脈采養を開始後に著明なインスリン抵抗性から高血糖を認め、速効型インスリンを60U/日使用し、ようやくコントロールを得た。剖検にてCushing病と判明した。

15 内因性インスリン分泌能が保たれていたにもかかわらず慢性腎不全と多彩な大血管合併症を併発した抗GAD抗体陽性肥満1型糖尿病(SPIDDM)の症例

緒方 明貴・荻原 智子・濱 ひとみ
山口 利夫・津田 晶子・矢田 省吾
本戸病院内科

症例は46歳、女性。父方に糖尿病、母方に高血圧の家族歴有。小児期より肥満。喫煙習慣有。33